ポポフニュース

2005年6月号

No.12

POPOF
Kahuzi-Biega National Park
Pole pole Foundation

ポポフ（POPOF）はポレポレ基金（Pole Pole Foundation）の略称で、1992年にコンゴ民主共和国で設立されたNGO（非政府・非営利団体）です。ポレポレとは「ぼちぼち」という意味のスワヒリ語で、あせらずゆっくりと運動の輪を広げていこうという気持ちがこめられています。

ポポフの目的は、コンゴ東部にあるカフジ・ビエガ国立公園の周辺で自然環境の保全、絶滅の危機に瀕する東ローランドゴリラの保護、地域振興、自然保護教育を実践することにあります。

会員はほとんど国立公園周辺に居住する地元の人々で、調査団を組織して土壌や動植物相の現状を調査したり、自然資源の持続的な利用をはかるように村人たちに呼びかけています。子供たちの年齢に合わせて環境教育のプログラムをつくり、就学前の児童から、大学生、主婦にいたるまでさまざまな教育事業を実施しています。また、国際交流を高めるために観光客に配布するパンフレットや絵はがきをつくり民芸品を販売して、地元でエコ・ツーリズムを推進するための活動をしています。

こういったポポフの活動を支援するために、日本支部ではカフジ・ビエガ国立公園周辺の人々の生活、アート、東ローランドゴリラを題材にした絵はがきを作成して販売し、展示会、講演会を開いて寄付を募り、現地で必要な物品を購入する資金にあてています。また、民芸品を作成する技術やアイデア、自然保護教育のための教材を提供したりしています。現地コンゴの政治情勢が思わしくないため日本ではまだポポフの会員を募集するまでに至っていませんが、将来日本からも人材を派遣してより国際的な活動ができるようにしていきたいと思っています。

ポポフニュースは、最近のポポフの活動を紹介し、今までに日本で集められた資金がどのような活動に使われたかを報告するニュースレターです。現地の人々やゴリラの近況についても報告していこうと思います。また、ポポフが創作したポポフ・グッズや絵はがきの販売についても紹介しますので、お知り合いで興味のある方にもぜひ伝えていただきたいと願っています。

ありし日のミシェベレ▼

活動報告（2004年６月から2005年５月まで）

６月（４月から引き続き）～１１月　　**2004年**

●**神戸市立王子動物園「ゴリラ特集」、「大型類人猿展」に協力。**ポレポレ基金の活動を展示するとともに、募金活動を行う。

６月１３日

●**神戸市立王子動物園ゴリラ来園記念講演会**
「ゴリラに学ぶ、自然に学ぶ～ゴリラと人との共生をめざして～」講師：山極寿一　　王子動物園（神戸市）

６月１９日

●**野生生物保全論研究会（JWCS）シンポジウム**
「アフリカ地元住民にとってのゴリラやゾウとは～現地の目線で共存を考える～」　講師：山極寿一
教育出版ビル（東京）

１０月１３日

●**法然院夜の森の教室「野生のゴリラ、野生の子ども」**
講師：山極寿一　　法然院（京都市）

１１月１２日～１３日

●**第７回サガシンポジウム　ポレポレ基金のブース発表**
京都大学百周年時計台記念館（京都市）

１１月１４日

●**第７回サガシンポジウム講演会 「ゴリラから学ぶこと」**
講師：山極寿一　　京都市動物園（京都市）
類人猿の保護活動をしているNGOとしてポレポレ基金を紹介

１１月９日～１４日

●**みやたやすのぶ展**　　堺町画廊（京都市）
ポレポレ基金の普及に協力。

１１月１８日

●**グループ・マブワナ「アフリカとともだちになろう」**
明徳幼稚園（京都市）

１２月１１日

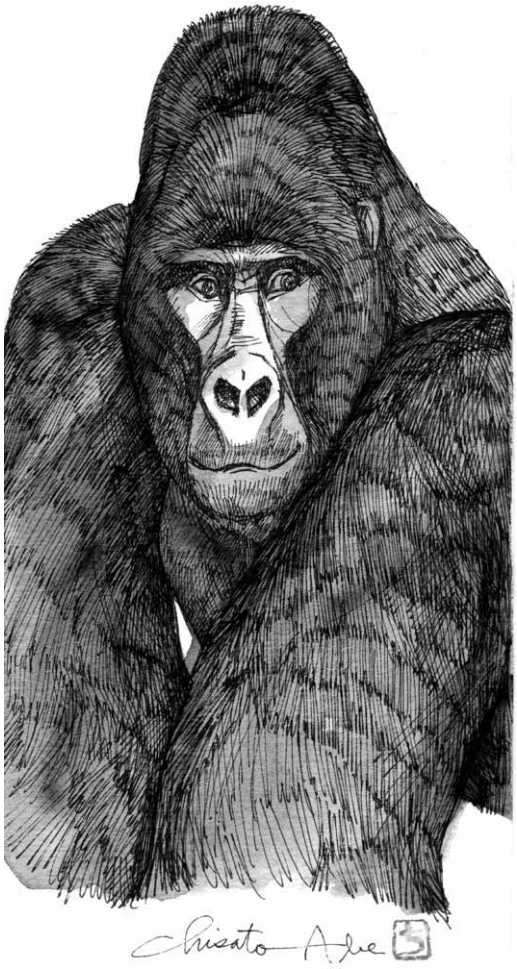
●**グループ・マブワナ「アフリカとともだちになろう」**
西陣子ども文庫（京都市）

１月３０日　　**2005年**

●**グループ・マブワナ「アフリカとともだちになろう」**
志賀町立図書館（志賀町）

３月８日～１３日

●**コンゴ民主共和国ポレポレ基金のためのアフリカンアートバザー**　　堺町画廊（京都市）



絵／阿部知暁

３月１３日

●**コンゴとポレポレ基金の近況報告**
講師：バサボセ・カニュニ　　堺町画廊（京都市）

３月１２日～９月２５日

●**特別展「魅惑のアフリカ熱帯林」**
ポポフの活動紹介とグッズ販売
日本モンキーセンター（犬山市）

４月２４日

●**グループ・マブワナ「アフリカとともだちになろう」**
城陽市立図書館（城陽市）

５月３日

●**モンキーセンター特別企画**
「みんなで踊ろう：コンゴの絵本とアフリカの歌」
グループ・マブワナ　　日本モンキーセンター（犬山市）

５月１７日～２９日

●**フェアトレード展**　　堺町画廊（京都市）

会計報告

収入		支出	
昨年度よりの繰越金	143,553	ニュースレター印刷費	40,425
講演会・シンポジウム カンパ	68,407	ニュースレター・ホームページ作成費	20,000
展覧会売上	115,407	ポポフグッズ材料費	30,333
作品売上寄付	91,080	郵送費	43,470
ポポフグッズ売上（現金）	280,188	ポポフへ送金	1,559,360
ポポフグッズ委託販売	4,100	次年度へ繰越金	801,668
寄付（現金）	1,139,466		
売上・寄付（郵便振替）	653,043		
受取利子	12		
計	￥2,495,256	計	￥2,495,256

「日本グレイトエイプス保護基金」と「ろうきん東海NPO団体等寄付システム」から、寄付金をいただいています。

ジョン・カヘークワ

ポポフの活動

「空き腹は聞き耳をもたぬ」ということわざがあります。ポポフが活動をしているキヴ地方の人々がよく口にする言葉です。そんな困難な事情を克服するため、ポポフは、仕事を創り出す、環境教育活動を推進する、保護区の自然資源の価値をよく知ってもらう、という３つの目標を同時に果たすような活動を行ってきました。とくに力を入れてきたのは、次の活動です。

１）森の再生
２）以前、密猟をしていた人々に対する洋裁教育
３）以前、密猟をしていた人々へのアートセンターへの参加呼びかけ
４）環境教育プログラム

これらの活動は、カフジ・ビエガ国立公園の周辺に居住する人々の生計活動を改善するとともに、自然資源の保全への参加を呼びかけるものです。ポポフはそのほかに、

５）国立公園周辺の６つの民族集団間で食料の交易を促進する運動
６）ゴリラを見にやってきた観光客に、村に滞在して土地の伝統的な料理を食べてもらうためのキャンプサイト造り
７）保護区内で樹木を伐採するかわりに、村に植栽した樹木を用いたり、日干しレンガによって家を建設する運動

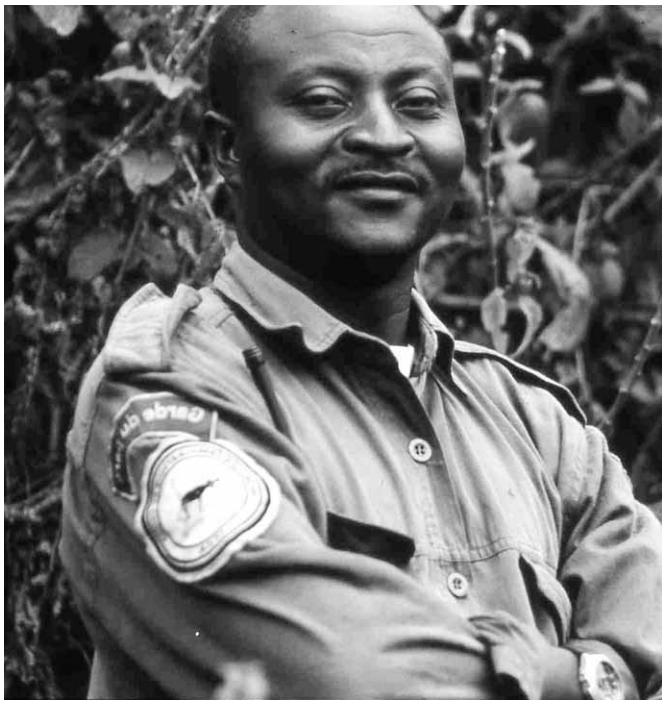
などを推進してきました。1991年に起こった全国規模の暴動、1994年のルワンダ難民の流入、1996年、1998年の内戦によって荒廃した森や村を建て直そうと、ポポフはあらゆる努力を続けてきました。今では日本支部のほかにイギリスやアメリカにも恒常的な支援団体ができ、人々の暮らしや自然の状態が少しずつ回復しています。世界の人々によってポポフが支えられていることを実感しています。

1993年以来、村々に植栽してきた樹木を、ポポフは1本5ドルで買い取ってポポフグッズの材料として使用しています。2004年までの11年間に7323個のポポフグッズが作られ、支援団体のある日本、イギリス、アメリカで販売されています。この活動は仕事を創出して密猟を減らすと同時に、グッズの製作を通じて郷土の自然やその意義を学ぶ効果があります。さらに、グッズの海外での販売はゴリラの価値と土地の人々のメッセージを世界に伝える役割を果たしています。

1999年にはじめた初等環境教育学級では、2004年から2005年にかけて107人の少年少女たちが学びました。９人の先生が自然環境の大切さやその適切な利用法を教え、公園のガイドたちもかわるがわる実際の生物を教材にして講義をしています。現在コンゴでは公務員の給料が支払われないため、多くの教員が仕事を離れ、あちこちで学校は閉鎖しています。ポポフはその不足を補うために、学校教育の補講も行っています。2001年には中等環境教育学級の建設が始まり、2005年には２つのクラスができました。73人の中学生が少し高度な自然科学や環境保全学を学んでいます。

ポポフの活動を推進する上で最も大きな困難は、現在も続いている内戦です。昨年の５月にもこの地方で相対立する政治勢力が衝突を起こし、兵士たちによってポポフの事務所やアートセンターは破壊されました。コンピューターやグッズなどが略奪されてしまい、スタッフ一同は頭を抱えました。政治的混乱が解決しない限り真の平和は実現しませんが、めげずにがんばろうと思っています。

教育活動での大きな障害は、親たちに学費を払う余裕がないことです。ポポフは環境教育学級を小学校と中学校に拡大しようと試みていますがなかなか資金が集まらず、教員に支給する給料などのめどが立っていません。それでも、その計画を少しずつ実現するステップとして今年から中学校に森林学の講座を開講します。生徒たちをカフジ・ビエガ国立公園や自然科学研究所へ招待し、そこで実習と体験を通して森林学を学ぼうという試みです。将来この体験学習を世界の子どもたちとも分かち合えればと願っています。今後も、日本、イギリス、アメリカの生徒たちと交流を持っていこうと思っています。



◀ジョン・カヘークワさん

バサボセ・カニュニ
コンゴの子どもたち

コンゴ民主共和国は日本の約６倍の面積があって、そのほとんどが森林におおわれる大変自然の豊かな国です。昔から４００以上の民族がそれぞれの文化と言語を持って暮らしてきました。でも、１９９０年代に起こった政治的な混乱によって、人々は苦しい生活を強いられるようになりました。その影響を一番強く受けたのは子どもたちです。

２００３年の統計では、コンゴ国民の識字率は６６％で、男女に分けると、男性７６％、女性５５％になります。読み書きができないのは女性に多く、とくに農村に暮らす女性に多いのです。最近は公務員の給料が払われず、地方の学校はどんどん閉鎖されています。仕事で家を離れる男性が多い農村では、教育が母親に任されるようになっています。このままでは、農村の子どもたちの識字率は急速に落ち込んでしまうでしょう。

都市と農村で子どもたちの暮らしはずいぶん違います。都市では子どもたちは社会から保護されていて、学校へ行かなくても家で学習の時間は与えられています。友達の家に行って本を読むこともできるでしょう。でもポポフの事務所があるミティ村は農村で、子どもたちは朝から夕方まで畑仕事の手伝いをします。朝の水汲みから食事のしたく、掃除、洗濯、家畜の世話など畑以外にもすることはたくさんあります。学校がなければ、子どもたちは親の仕事を1日中手伝っていなければならなくなるのです。

しかも、最近の内戦で家畜を失い、仕事を失った男たちがこぞって森に入り、金、ダイヤモンド、鉄、コルタンなどの地下資源を採掘します。国立公園に入って樹木や竹を伐採したり、野生動物を狩猟したりする人が増えました。子どもたちはこういう不法な仕事も手伝うようになりました。法の目をかいくぐって生きることを覚え、しかも読み書きを知らないために、規則を理解することもできない。こうした不幸な子どもたちが増えているのです。

ポポフはこれらの悲劇を食い止めるために、農村で子どもたちが学校教育を受けることを奨励しています。学費を払えない子どもたちを援助し、勉強する時間を子どもたちに与えるよう親を説得しています。

また、私たち生物学者は、子どもたちが自分たちで食料を確保できるような活動を始めました。内戦で多くの家畜が失われてしまったために、育ち盛りの子どもたちは動物タンパク質の摂取が不足しています。そ

▶村の子どもたち

こで、子どもたちにモルモットという小形動物を配り、自分たちでそれを育てて食べられるようにする試みです。モルモットは繁殖力が強く、雑食で利用できるあらゆる種類の植物を食べるので、餌を確保する必要はありません。家の中で育てられるので、野生動物に狙われることもなく、簡単に増やすことができます。

親たちが保護区で密猟をしてまで食料を確保しなくてもいいように、そして子どもたちが学問を身につける時間を得られるように、私たちは努力しなくてはなりません。子どもたちはコンゴの明るい未来の象徴です。彼らが元気に育ち、私たちが残そうとしている自然と文化を未来に生かしてくれることを私は心から願っています。

▲モルモット

バサボセさん学位授与▼

◀コルタン探掘

バサボセさんが博士になりました

◀バサボセさん講演会

去る3月２３日、京都大学で博士号の授与式があり、尾池和夫総長からバサボセ・カニュニさんが学位を授与されました。珍しくスーツ姿のバサボセさんはいくぶん緊張気味でしたが、学位記を手にして満面の笑顔を浮かべていたのが印象的でした。論文博士で、学位の対象になった論文はチンパンジーの食性、遊動域、集団サイズに関する３つの論文です。いずれも国際誌に掲載されました。1994年に霊長類学をはじめてから、10年をかけて完成させた質の高い論文ばかりです。その間、９回21ヶ月にわたって来日し、データを分析し、文献を調べ、多くのチンパンジー研究者と討論を重ねてきました。コンゴが内戦になり、思うように調査をできなかったり、連絡が取れなかったりと、さまざまな困難がありました。それを乗り越えて見事に博士号を取られたことを心から祝福したいと思います。今後、チンパンジーをはじめとするコンゴの類人猿研究、自然と人の共存、そしてコンゴの若い科学者たちの育成に活躍していただきたいと期待しています。

山極寿一

ゴリラたちの近況

ポポフニュース11号で、ムガルカ集団がシルバーバックのムガルカとメスのルシャシャ、３歳になるチュバカの３頭で暮らしていることを報告しました。ゴリラの集団としては最小のものと思われましたが、2004年のはじめにメスのルシャシャがチマヌーカ集団へ移籍してしまいました。驚いたことに、ルシャシャは子どものチュバカを連れて行かず、ムガルカはチュバカと２頭で暮らすことになったのです。

ゴリラのオスが離乳したばかりの子どもと２頭で暮らすなんて今まで聞いたことがありません。なぜ、ルシャシャはチュバカを連れて行かなかったのでしょうか。

それは、ルシャシャの前にチマヌーカ集団に移籍したメスたちに起こった事件が影響しているようです。2003年にムガルカ集団から移ったメスたちのうち、２頭が出産しました。でもその２頭の赤ん坊は、生まれて３日後と５日後にチマヌーカによって殺されてしまったのです。ルシャシャはそれを知って、チュバカが子殺しに会わないように、父親のムガルカのもとへ残して移籍したと考えられるのです。

オスが乳児を殺す行動は約30種の霊長類に知られています。いずれも自分と血縁関係のない子どもを殺しており、オスがメスの発情を早めて交尾をし、自分の子どもを残そうとする繁殖戦略と見なされています。授乳中はメスが発情しないので、乳飲み子を除去することによってお乳を止め、メスの発情をうながそうとする行動というわけです。子殺し行動はヴィルンガ火山群のマウンテンゴリラに16例が報告されています。このためヴィルンガでは、メスが子どもを残して集団間を移籍する傾向があります。

カフジでは1972年以来、２～４集団が観光のために人付けされ、毎日観察されてきましたが、子殺し行動は全く報告されていませんでした。そのせいか、カフジのゴリラたちは子連れで集団間をわたり歩く傾向がありました。ジョン・カヘークワさんと私は、1983年以来確認されたメスの移籍で18例が他のメスと、13例が乳児や幼児と連れ立っていたことを報告しています。チュバカのような幼児を残してメスが移籍した例はなかったのです。

◀母親と子ども

これまで子殺しがなかったカフジでなぜ突然乳児が殺されたのか。その理由は、内戦中に多くのゴリラが殺されたことにあると私は考えています。とくに、これまで集団を率いてきた熟年のオスたちが殺され、多くのメスたちが若いオスを頼りにして集団をつくらなければならなくなったことが大きな原因でしょう。ヴィルンガでも子殺しをするのは20歳前の若いオスたちです。チマヌーカも2002年に自分の集団をつくったばかりの18歳の若いオスでした。ムガルカや他の集団を率いているムファンザーラ、ビリンドゥワ、アルフォンスもまだ若いオスたちです。これらのオスたちがメスをめぐって精一杯張り合っていて、時には暴走してしまう危険があるのが今のカフジの現状のような気がします。

ムガルカとチュバカには、昨年の９月に８頭のメスが加わって再び大きな集団になりました。移籍してきたのはおそらく元ミシェベレ集団にいたメスたちだろうと推測されています。ミシェベレ集団が見えなくなってからすでに１年以上たち、ミシェベレは密猟者に殺されて集団は崩壊してしまったのだろうと考えられるからです。これまでシルバーバックを殺されたマエシェ集団やニンジャ集団と同じように、しばらくメスだけの集団をつくっていたのでしょう。子どもを連れて移籍してきたメスはいません。今のところ、チュバカとメスたちは仲良く暮らしているそうです。平和な暮らしが続くことを願っています。

吉報もあります。今年になってチマヌーカ集団には２頭の赤ん坊が生まれました。チマヌーカはこれらの赤ん坊に危害を加える様子はありません。また、５月２日にはチマヌーカ集団に双子が生まれました。これまでカフジでは２回双子が生まれていますが、最初は片方だけ、２回目はどちらも生き延びることができませんでした。今度こそ２頭とも健康に育ってほしいものです。まだ双子の性別は不明ですが、次号のニュースレターでは元気に育っている双子が男の子なのか女の子なのかお伝えできるでしょう。

▶若いヒトリゴリラ

催しのご案内

特別展「魅惑のアフリカ熱帯林」

３月１２日～９月２５日
日本モンキーセンター（犬山市）

ヒガシローランドゴリラやポポフの活動紹介をしています。

日本霊長類学会公開シンポジウム

「GRASP-Japan：日本人による
大型類人猿の研究と保全活動」

７月３日　倉敷市芸文館(倉敷市)

グループ・マブワナ
「アフリカとともだちになろう」

７月２３日　ひつじ文庫（池田市）
７月２７日　法然院（京都市）
７月３１日　五個荘図書館（滋賀県）

GRASP - Japan
（大型類人猿保全計画日本委員会）特別展示

８月１４日～９月３日
愛知万博国連館（名古屋市）
ポポフの紹介をします。

第８回サガシンポジウム

１１月１８日～２０日
大阪芸術大学（大阪市）

19日はジェーン・グドールさんの記念講演、20日は天王寺動物園で類人猿保護の活動紹介と特別講演があります。

ポポフ・グッズ通信販売のお知らせ

ポポフ日本支部では、ポポフの会員が作成したポポフ・グッズを販売して、その売り上げを現地の活動資金に寄付しています。ご協力いただける方は、郵便局で青色の振り込み用紙に口座番号：００８１０－１－９０２１７，加入者名：ポレポレ基金、と記入した上で、ご希望の品名を書き込み、該当する金額をお振り込み下さい。折り返し、グッズをお送りいたします。★は新製品です。

☆ポポフ絵はがきセット（１０枚組）	１０００円
☆ビチブ・ムフンブーカ絵はがきセット（５枚組）	６００円
☆東ローランドゴリラ・ペンダント	２２００円
☆東ローランドゴリラ・キーホルダー	２２００円
☆どこでもゴリラ・ブローチ（木彫り）	３０００円
★ケイタイ・ストラップ（木彫ミニゴリラ）	３５００円

連絡先：〒606-8502　京都市左京区北白川追分町
京都大学大学院理学研究科人類進化論研究室
ポポフ日本支部

☆東ローランドゴリラ
ペンダント・キーホルダー

☆どこでもゴリラ
ブローチ（木彫り）

☆ポポフ
絵はがきセット

★ケイタイ・ストラップ
（木彫ミニゴリラ）

☆ビチブ・ムフンブーカ
絵はがきセット

お願い：上記のようなポポフの紹介とポポフ・グッズの展示・販売を各地で行いたく思っています。可能な場所と展示を引き受けてくださる方があれば、ご連絡下さい。

コンゴ民主共和国キヴ地方の昔話

蚊と手と耳のはなし

語り手：マラシ

むかしむかし、蚊と手と耳は仲の良い友だちでした。蚊も手も耳も結婚しており、おかみさんがいました。
ある日、蚊と手と耳は、それぞれのおかみさんの実家を訪ねてみようと思いました。
「みんなで、蚊のおかみさんの実家へ行ってみよう。手のおかみさんの実家へ行ってみよう。耳のおかみさんの実家へも行ってみよう」
そう言って出かけていきました。

蚊と手と耳が、蚊のおかみさんの実家に着くと、突然強い風が吹いてきました。
「ぼくは体が軽いから、風にさらわれてしまったら大変」
蚊はそう言うと、壁にくっついていました。

やがて食事時になり、ごちそうが運ばれてきました。
蚊は言いました。
「まだ風が吹いているから、ここから動けないんだ。君たちは先に食べておくれ。でもぼくの分は残しておいてよ」
けれど、手と耳は出されたごちそうを全部食べてしまいました。

蚊のおかみさんの実家を後にすると、今度は手のおかみさんの実家に向かいました。そこでも、ごちそうが運ばれて来ると、また風が吹いてきました。
「風に飛ばされないように隠れているから、先に食べておくれ。でも、ぼくの分、残しておいてよ」
蚊はそう言いましたが、手と耳は、また自分たちだけで全部食べてしまいました。

その後、蚊と手と耳は耳のおかみさんの実家へも行きましたが、ここでも同じことでした。

蚊はとうとう怒りました。風がやむと飛んで来て、手をチクリと刺しました。
「いたたっ。ぼくを刺さないで、ぼくじゃないよ。全部食べてしまおうと言ったのは耳だよ」
と手は言いました。すると耳は
「ぼくじゃないよ。君の分も食べてしまおうと言ったのは手だよ」と言いました。
「もう、いい」
蚊はもっと怒りました。

そのときから、蚊は手や耳と仲が悪くなり、毎日追いかけています。蚊がブーンと羽音をたててやって来ると、耳が聞きつけて、手は耳が刺されないように蚊を追い払います。しかし、ひっきりなしに蚊がやって来るものですから、手と耳は追い払うのが大変で、休む暇もありません。

はいこれで、おはなしおしまい。

訳／絵：伏原納知子

近刊案内

■ 末原達郎著
『**人間にとって農業とは何か**』 世界思想社

■ 大井徹著 『**獣たちの森**』
日本の森林／多様性の生物学シリーズ③ 東海大学出版会

■ 小山直樹著
『**インドサル学紀行**』 東海大学出版会

■ 山極寿一著
『**ゴリラ**』 東京大学出版会

■ 小風さち・阿部知暁著
ちいさなかがくのとも『**ぼくごりら**』 福音館書店

■ 中村徳子著
『**赤ちゃんがヒトになるとき**』 昭和堂

■ 秋山なみ・亀井伸孝著
『**手話でいこう**』 ミネルヴァ書房

■ 水野一晴編
『**アフリカ自然学**』 古今書院

■ 和　秀雄著
『**オスとメスと男と女**』 寺子屋新書

■ 福井勝義編著
『**社会化される生態資源**』 京都大学学術出版会

■ 井上宏著
『**笑い学のすすめ**』 世界思想社

■ 高田公理・栗田靖之編
『**嗜好品の文化人類学**』 講談社選書メチエ